《巻頭言》

高砂義勇隊の大和魂
―日本人として従軍した台湾の原住民―

理事・拓殖大学政経学部教授　丹羽文生

先般、台湾を訪れた折、台北郊外の山間にある温泉郷として有名な烏来（ウライ）まで足を延ばした。マレー・ポリネシア系の原住民であるタイヤル族が多く暮らす集落で、日帰り入浴施設や温泉旅館が数多く立ち並ぶ。

そんなリゾート地に日本と台湾との深い歴史的関わりを象徴する慰霊碑があることは余り知られていない。「台湾高砂義勇隊戦没英魂碑」がそれである。

高砂義勇隊とは第二次世界大戦末期に台湾の原住民によって編成された部隊である。当時、台湾の原住民は高砂族と呼ばれた。言うまでもなく、その頃の台湾は「日本」だった。そのため、台湾からも約21万人もの人々が従軍した。このうち約6,000人が高砂族だったという。

彼らの身分は弾薬・食料の輸送といった雑役を請け負う軍夫だったものの、その奮戦ぶりには誰もが驚愕した。山地育ち故の強靭な体力、視力や聴力にも優れ、弾雨が降り注ぐ中、蕃刀で瞬く間に森林を伐採して道路を切り開き、橋を架けていく。その意気込みと士気の高さに、当初こそ「未開人」と蔑んでいた内地の日本兵も彼らに尊敬の念を持ったという。

やがて戦闘要員として南洋のジャングルへ。アメリカ兵に堂々と対峙した。1943年７月発行の杉崎英信著『高砂義勇隊』（日本出版配給）にフィリピンに赴いた中山講一（日本名）の手記「ジャングルは我等の独壇場」が載っている。

「われゝ高砂族は、亜熱帯、熱帯の険峻な山岳、ジャングル地帯に育って来てゐる。（中略）さあ来い、比島のジャングル。米英の兵隊共よ、いくら隠れても駄目だぞ。われゝは世界一強い日本の兵隊さんの手足になって、ジャングルをどしゝ伐り開いて進むからな」

正確な数は不明だが、従軍した高砂族の半数が戦没したと言われている。烏来の慰霊碑には「霊安故郷」と記されている。李登輝元総統が揮毫した。高砂義勇隊の英霊たちが故郷に帰れるようにとの願いを込めて、この４文字が刻まれたらしい。1992年11月にダイヤル族の酋長だった周麗梅が借金までして建立したという。

ところが、2015年８月、台風13号が台湾を直撃、慰霊碑は土砂の中に埋まり、その上に立っていた高砂義勇隊の銅像も薙ぎ倒されてしまった。10年近くが経った今でも、そのままになっている。

筆者が訪ねた時は、銅像こそ近くに移されてはあったものの、土砂に埋もれた慰霊碑は「霊」の文字しか確認することができなかった。余りにも無残な姿に思わず息を呑む。手を合わせ、頭（こうべ）を垂れ、そっと目を閉じる。ただただ御霊安らかなれと祈る他なかった。